

津軽地方の女子教育を考える その2

A STUDY OF WOMAN'S EDUCATION IN TSUGARU AREA No.2

坪 田 庸 子

Nobuko Tsubota

目 次

はじめに

I. 津軽地方の教育の息吹をたずねて

1. 藩政期の教育は
2. 幕末から学制までの教育

II. 学制発布後の津軽地方の教育

1. 東奥義塾
2. 菊池幾久子
3. 公立小学校の女子教育
4. 高谷徳子

III. 学制発布後の都会の教育

1. 津田梅子
2. 高杉幸子

—以上弘前学院大学・短期大学紀要第24号掲載

—本稿を続けるにあたって—

IV. 津軽地方の女子のための高等教育機関

1. 私立和洋裁縫学校の柴田やす
2. 私立高等家政女学校の小山内もと
3. 県立高等女学校
 - ① 永井直好
 - ② 工藤浅吉
 - ③ 長谷川安津子氏
4. 弘前女学校
 - ① 相馬みどり氏
 - ② 山鹿さた氏

おわりに

一本稿を続けるにあたって

前号Ⅲ・学生発布後の都会の教育の中で、岩倉具視大使とともに米国へ留学した五人の女子の中の大山捨松は青森県上族山川与七郎女（陸軍大将大山巖公爵夫人）と記述したが、事実は山川捨松は万延元年（1860）2月24日会津藩一千石の家老山川尚江重固の末娘で、幼名咲子であることが、捨松の曾孫である久野明子氏によって書かれた『鹿鳴館の貴婦人大山捨松—日本初的女子留学生』によって明らかとなった。

本文に取りかかる前にまず、何故会津藩の家老の娘が青森県上族の娘として記されることになったのか前述の『鹿鳴館の貴婦人大山捨松—日本初的女子留学生』により解明してみたい。

明治2年（1869）11月、客保（会津藩主）の嗣子容大（当時一歳）をもって松平家再興が許された。これで会津戦争後、身分も定まらなかった流浪の民会津藩士たちにも未来へのかすかな希望が持てるようになった。しかし、実際に彼らに与えられた土地は、本州最北の不毛の地陸奥三万石で、嘗ての肥沃の地会津二十三万石と比べると天と地ほどの違いであった。一中略—この新しい封地は、斗南と名付けられた。現在の青森県下北郡、上北郡、三戸郡と岩手県二戸郡の一部にあたる。地理的に見ると、斗南藩の領地の真中には七戸藩と八戸藩が入り込んでいて、一つの藩が他藩によって南北二つに分けられている。こうした変則的な領地で旧会津藩士達は新しい出発を余儀なくされたのである。

明治3年の春から10月にかけて、東京、猪苗代、越後の高田に別れて謹慎生活を送っていた旧会津藩士とその家族達は新しい封地へ向けて大移動を始めた。その数は約一万七千人、ある者は陸路を歩き、ある者は船に乗って海から斗南へ渡った。

6月6日、捨松も母唐衣や姉達それに会津残留組とその家族約二百五十名と一緒に兄山川大蔵に引率され若松を出発した。祖父重英はすでに謹慎中の明治2年の春に亡くなっている。ほとんどの家族は会津戦争で家財道具を失っており、身の周りの物だけを持って徒歩で津川まで行きそこからは阿賀川を船で下り、6月10日に新潟に到着した。一項は新潟からは政府が移住者たちのために借り切ったアメリカの該燐蒸気船ヤンシー号に乗り込んだ。（①久野明子著『鹿鳴館の貴婦人大山捨松—日本初的女子留学生』p.45）

「21日に、船が陸奥湾内の野辺地港に入港すると捨松たち家族は直ちに藩庁の置かれた五戸に向かった。すでに大蔵（捨松の兄山川大蔵）は藩の権大参事という要職についており、幼い藩主容大に代わって藩政を執っていた。一中略—この時期大蔵は、名を浩と改めている。一

中略—斗南藩の最高責任者として自らの行為に恥じることなく、道にかかった生き方を藩民に示そうと固い決意を表したのである。

年が明けた明治4年（1871）の2月、藩庁は五戸から田名部へ移され、捨松たちも坂井勝之進という人の家に世話になることになった。藩庁は曹洞宗の円通寺に置かれ、ここで斗南藩の本格的な行政が始まったのである。」

（②久野明子著『鹿鳴館の貴婦人大山捨松—日本初的女子留学生』p.45）

捨松は11歳になっていた。兄浩は藩の指導者として、自らすすんで粗衣粗食の生活を実行していたため、山川家はかえってよその家庭よりもきりつめた暮らしをしなければならなかった。一中略—育ちざかりの妹たちに満足な食事も与えられないことを気にやんだ浩は、母親と相談して一番下の捨松を箱館にやることにした。斗南での地獄のような生活に比べれば、箱館のほうがはるかに人間らしい生活が送れると考えたからである。（③久野明子著『鹿鳴館の貴婦人大山捨松—日本初的女子留学生』p.47）

「10月半ば過ぎ箱館を発って、捨松は母親や姉たちに別れを告げるために田名部に立ち寄った。この時、母唐衣はお国のために愛する娘を遠く異国に旅立たせなければならない母親の切ない気持ちを込めて、幼名咲子を「捨松」と改名している。これがお前との永の別れとなるかも知れない。私はお前を捨てたつもりで遠くアメリカにやるが、お前がお国のために立派に学問を修めて帰ってくる日を毎日心待ちにしてして待っているよ、という気持ちをこの二つの字にこめたのであった。」（④久野明子著『鹿鳴館の貴婦人大山捨松—日本初的女子留学生』p.57）

久野明子氏は『鹿鳴館の貴婦人大山捨松—日本初的女子留学生』の中で感慨深げに次ぎのように語っている。「新しい時代の夜明けにあたって明治政府が打ち出した北海道開拓政策のために、山川家の兄妹二人は会津藩に生まれたがために遠く離れたアメリカ留学生として渡る運命をたどることになったのである。」（⑤久野明子著『鹿鳴館の貴婦人大山捨松—日本初的女子留学生』p.43）

参考のために、後にわが国初的女子留学生となり、大山公爵夫人となった山川咲子の幼小の頃のことを記した。捨松個人の生活を見るだけで、私たちは明治初期のわが国の状況を垣間見ることができたのではないだろうか。

Ⅳ. 津軽地方のための高等教育機関

大山捨松たち五人が渡米したころ、逆にアメリカからも婦人宣教師たちが続々やってきたが、そのことについては、関東学院大学経済学部助教授の小松山ルイ氏が『アメリカ婦人宣教師―来日の背景とその影響』の中で、次のような書き出しで追及しておられる。「明治初期、バイブルと十字架をたずさえてアメリカから太平洋を渡った一群の淑女たちがいた。彼女たち婦人宣教師によって種蒔かれた近代的女子教育の芽は、日本人女性の間で豊かに稔り、現在までその影響は及んでいる。

彼女たちは何故、何のために故国を離れ、何を日本にもたらそうとしたのか。」(⑥『アメリカ婦人宣教師―来日の背景とその影響』東京大学出版会1992年版カバー)

そしてまた、ここ津軽でも女子教育の芽が育っていることは前述のとおりであるが、弘前女学校、県立弘前女子高等女学校のほかにもう二つ、女性によって創設された学校のあることを忘れてはならない。

その一つはかの有名な柴田やす氏によって創設された弘前和洋裁縫女学校・現在の柴田学園であり、もう一つは小山内もと氏が創設した弘前家事裁縫専修所、後の私立弘前高等家政女学校である。

1. 私立弘前和洋裁縫学校の柴田やす

大正12年2月10日設立認可が決まり、私立弘前和洋裁縫学校として出発した。

この学校の創設者柴田やすは「明治14年(1881)1月1日、父今村儀三郎、母ひさの長女として、東津軽郡青森大字安方町に生まれた。(⑦船水清著『ここに人ありき 柴田やす伝』p.3)

「廃藩置県(明治4年)後の混乱が治まった、この頃、公選議員による第一回県会(同12年3月)が開かれたり、学校や病院、銀行などもつぎつき開設されて、ようやく文明開花の曙を迎えていた。青森に県庁が置かれてから、にわかに活況を呈し、また北海道開拓に伴ってこの港から渡道する移住者がふえたので、一段とにぎやかさを加えていた。当時やすの父儀三郎は安方町で酒造業を営んでいた。母のひさは南了益(南家は代々医を業とし、「元応丸」という家伝薬を製造販売していた)の娘である。一中略一娘ひさが1月元日に長女を生んだと聞くと南了益は非常に喜び、「世は浦安の安方に生(あ)れて久しく安けくもあれ」と祝の歌を寄せ、「やす」と命名してくれたという。(⑧船水清著『ここに人ありき 柴田やす伝』p.4) このように誕生したやす女史がどのようにして学校を創設するに至ったかについての詳細は前述の『ここに人ありき 柴田やす伝』に書かれてあるが、「やす女

史が26才になって神田橋にあった東京府家事科教員伝修所に入学、さらに築地外国語学校の洋裁部に通って洋裁を修得し、東京府の教員検定試験に取りかかり、その後、東京府管内の小学校裁縫科正教員の資格を取ってから板橋町(当時)の志村小学校に訓導として勤めることになった。志村小学校に勤めるまでの間にも東京実業女学校技芸部に通っていたという。(⑨船水清著『ここに人ありき 柴田やす伝』p.14~16) このようにしてやす女史は家庭の事情もあったが、非常に向学心に燃えていた。さらに女史は「青森に帰り、県内の小学校裁縫科正教員の免許を受け、やがて自分の母校である新町小学校に勤め、一中略一青森の大火後は浦町小学校に勤め、今度は文部省の検定に合格して中等学校家政科被服教員免許状を取得し、青森市公立女子実業補習学校(現青森市中央高校の前身)に勤めた。この学校でのやす女史は、東京で学んだ新しい技術を生かして裁縫、家事、手芸などを生徒に教え、その熱心な指導ぶりは同僚たちにも尊敬されたほどであった。」(⑩船水清著『ここに人ありき 柴田やす伝』p.17~18)

やす女史はこれでもかこれでもかと襲いかかる逆境をきりぬけ、生家今村家がもともと弘前の出であることもあって、「大正3年1月にそれまで勤めていた青森の女子実業補習学校を辞職して、一家は弘前に移り、取りあえず、鍛冶町に借家をかりて住んだ。」(⑪船水清著『ここに人ありき 柴田やす伝』p.19) 弘前に移り住んだやす女史は「どこか自分の経験を生かして若い人たちに教えたいと考えていることを当時の県立弘前高等女学校の教鞭をとっていた永山源之丞、杉山壽之進(この二人は高山文堂とともに和洋裁縫学校の「三山先生」といわれ、やす女史の絶大な協力者となる)に相談した。一中略一これを聞いて二人の先生は、あなたほどの技術をもっているのに、今更また学校の先生をする必要はないから、すぐに私塾を開いた方がよい、と口を揃えてすすめた。当時弘前には県立弘前高等女学校と私立の弘前女学校の二つの女子中等教育施設があったが、これらの女学校を卒業しても、普通学科は別として、家事や裁縫のような家庭に入ってから、すぐに役立つ素養においてはなお不十分であつたら、そのためさらに裁縫塾に通って花嫁修業をするものが多かった。二人の先生は、自分らは現に県立女学校で教えている身であるが、いつも女子にはもっと実学が必要だと痛感しており、世間でもそれを望んでいるが、あなたが私塾を開くことは、その要望に答えるものであり、もっとも適任者であると激励した。」(⑫船水清著『ここに人ありき 柴田やす伝』p.20) このような当時の状況から考えてやす女史は決心したのである。そこで、まず、鍛冶町の借家の軒下に「和洋裁縫手

芸教授」の看板を下げた。」(⑬船水清著『ここに人ありき 柴田やす伝』p.22)これが後の柴田学園のそもそもの始まりである。

やす女史は大正12年の開校当時の状況について、次のように記している。

『当時社会の文運はようやく進み、国家の教育も日ましに隆昌におもむきまして、国民ひとしく文教の恵沢に浴することのできる時代でありましたが、ただその機関が十分社会の要望に添うことができなかったうらみがあったのであります。殊に女子の使命である家政教育方面においては、いっそうその感を深くしたのであります。当時は家事裁縫と申しまして、非常に軽視され、勤労をいやしめ、知的方面のみ重視された時代でありました。しかるに女子はどうしてもその實際生活に即した、実技と勤労が必要でありますので、ここに“教育即生活”の目標を定め、私の母校である東京府家事科教員伝習所の学則を参照し、地方の実情に鑑み、女子に必須なる裁縫家事を主とし、育児衛生に重点を置くところの各種学校として、大正12年2月10日、県の認可を得、百名の定員をもって設立したのです。(⑭船水清著『ここに人ありき 柴田やす伝』p.31)

その後、弘前和洋裁縫女学校は娘の今村敏女史、孫の城太郎氏がが受け継ぎ、柴田学園という幼稚園、高校、専門学校、短期大学、大学を含む総合学園として輝かしい発展を遂げているのである。

2. 私立高等家政女学校の小山内もと

「私立弘前高等家政女学校は大正15年1月13日に県立弘前高等女学校(現弘前中央高校)を退職した小山内もとによって同年4月山道町の自宅に弘前家事裁縫専修所として開かれた。翌年(昭和2年)には校舎を建てて家政女学校を設立した。これは和洋裁縫女学校とはほとんど同様で、和裁を主に家事一般を教え、市内のみならず郡部の女子を集めたので、「和洋」と「家政」と呼ばれて両校併立することになった。」(⑮船水清著『ここに人ありき 柴田やす伝』p.40)

「小山内もとは明治9年7月30日弘前土族の家(笹森町の今家)に生まれ、明治24年1月に上京し、苦学力行して私立共立女子職業学校裁縫編物本科(現在の共立女子大学の前身)に入学して、明治26年8月10日に同校甲科編物本科を卒業し、裁縫補習科も修了し、帰郷して29年3月11日に(弘前市立弘前高等小学校准訓導となった(翌年正教員の免許を得て同校訓導に)教員の資格を取り、弘前市で教べんをとった。そして33年1月から3月まで東京裁縫女学校の裁縫高等科で修業して、師範学校女子部・高等女学校教員の免許を得た。明治34年北海道

へ渡り、明治37年北海道庁立札幌高等女学校から故郷へ帰り、弘前高女の家事・裁縫の教諭として13年間勤務したのである。なお、弘前家政高等女学校は、第二次大戦後の新学制で鷹ヶ岡女子高等学校となり(中学校も併置)、昭和31年3月20日に最後の卒業生20名を送って閉校した。」(⑯荒井清明著『近代津軽を彩った人々16—小山内もと』1992年6月18日、陸奥新報より)

この弘前家事裁縫専修所は「女子の職業又は家政に必須なる和洋裁縫および諸種の技芸と学科とを授け、其の教授内容を実践せしめ、職業婦人又は家庭婦人として其の本務を全ふせしむるに充分なる實際的技術および品性を養成する」ことを目的に掲げている(規則第一条)4月8日午前9時から会場式がおこなわれ、60名の新入生があった(⑰荒井清明著『近代津軽を彩った人々 17—小山内もと』1992年6月25日陸奥新報より)とあるが、もとの心情をあらわすものとして「昭和14年発行の『鷹城随筆』に「四月の臉に浮かんだ事」と題して寄稿している。その中で「才色双絶とか、才徳兼備とかいふ言葉があって、婦人に対しては最高の讃辞である。しかし讃辞を受ける人は百人に幾人あろうか(中略)才徳はその人の精神修養の努力でどんな人でも容易に才徳の美を蓄へることができることと思ふ。私は生徒に対し、いつもこの事を説いている(中略)学術だけが優れて一般的な精神教養がなくては、才だけあっても、徳が完全に阻害されることと思ふ。(中略)私は文化を愛する。女の身だしなみもまた、文化の一つの標識であろう。故に私は学術と精神教養の両立を尊重する。精神文化のレベルを高めること、社会を才徳の婦人で満たすこと若き日本の使命はここにもあると思ふ。」(⑱荒井清明著『近代津軽を彩った人々 17—小山内もと 下』1992年6月25日陸奥新報より)がある。この文章は小山内もとが日頃モットーとしたものではなかっただろうか。

「もと女史経営のこの学校は昭和15年に紙漉町の旧富田小学校跡に校舎を移し、いよいよ発展するかに見えたが、その年のうちに校主唐生敏世に学校を上げて譲渡して弘前を去っていった。」(⑲船水清著『ここに人ありき 柴田やす伝』p.78)

以上二人の女性が明治期、大正期に多くの困難にめげず、女子のための教育機関を創設したことを述べてきたが、次ぎに県立の女学校で大きな働きをした永井直好、工藤浅吉、県立女学校を卒業後新しい女子のための専門学校を創設した長谷川安津子女史のことについて述べたい。

3. 県立高等女学校

永井直好と工藤浅吉の活躍ぶりは陸奥新報に連載された荒井清明著『近代津軽を彩った人々』から見ていきたい。

① 永井直好

「明治36年11月26日付けで、開校2年半後の第一高等女学校（42年に弘前高等女学校と改称。現在の弘前中央高等学校の前身。）以下「弘高女」と略記）の第二代校長に任命され、12月に東京から着任したのが35才の永井直好である。以来大正14年3月31日付けで、58才をもって退職するまで、実に足掛け23年、満21年4ヶ月にわたって校長を務めた。学校の告別（離任）式は4月8日に行われ、24日に午後を休校とした全校生と、教職員など多数の人々に見送られて離弘した。一中略一送別会の席で、石郷岡市長は「永井先生には、本市に於ける高等女学校長として、今日まで其職にある事已に23年、其間専心鋭意地方女子教育の中堅を以て其衡に当られ、爾来卒業生を出せし事已に千二百余名の多数に上り、（中略）如斯20余年の久しきに亘り、而も同一学校の主脳者として、終始一貫毫も健怠の色なく女子教育を以て畢生の使命とするが如きは、要するに先生の威徳の然らしむる処にして、他に殆ど其類例なかる如く、実に畏敬措かざる処でございます（以下略）」と惜別の挨拶を述べている」（②荒井清明著『近代津軽を彩った人々 5－永井直好』1992年3月19日陸奥新報より）永井直好は当時の女子中等教育に貢献した男性の一人であった。彼の働きは次ぎのようなものである。

「永井直好着任後の37年3月に第一回卒業式が行われ、36名が卒業した。そして4月から就業年限一年の補習科が開設された（42年3月で廃止。昭4年に研究科、同17年に補習科が設置されるが、これは別種のもの）「校友会誌」の創刊は昭和17年12月末であり、弘高女は漸く発展の基礎が確立した一中略一第一回卒業式で永井校長は「良妻賢母たるは難し、而して其の難きを知るもの者、良妻賢母たるをえん。」という趣旨の訓示をしている。補習科は小学校女子教員の有力な供給源であった（明治18年に県女子師範学校が廃止され、青森市に県立青森高女と校舎を共有して復活するのは同44年である。）

大正5年1月16日の「弘前新聞」に「弘前女学生気質」という永井校長の談話が掲載されている。その中で「一、最も質実沈静、いずれかといへばあまりはでさが無さ過ぎ、多少時勢に遅れていしまいかと思われる位である。服装なども至って質素で誠に

結構である。これは土地の関係もあらうが、要するに一般的に質朴で多少消極期の素質あるためだらうと思ふ。（中略）当地の女学生は、自分の意志を充分発表しえない傾きがある。指導のしかたでは発表し得るようになる。誠に指導しやすい方である。質実穩健にして家庭主義の指導をする考へである」と述べている。一中略一永井校長がかなり強力に県に働きかけたものに五年制の導入がある。大正9年7月に「高等女学校令」が改正されて、第九条に「高等女学校ノ就業年限ハ五箇年又ハ四箇年トス」となったのである。弘高女卒業生の中には、上級学校へ進む準備として、私立弘前女学校（聖愛高校の前身）の補習科へ進む者があったのである。（②荒井清明著『近代津軽を彩った人々 7－永井直好』1992年4月9日陸奥新報より）

② 工藤浅吉

永井直好が校長の時の「弘高女は、運動会や音楽会などで市民にも親しまれたが、またスポーツでも庭球や卓球・陸上競技など県下女子スポーツ界の先達として名をはせた。」（②荒井清明著『近代津軽を彩った人々 7－永井直好』1992年4月陸奥新報より）丁度その頃、工藤浅吉が県立弘前高等女学校に赴任している。

「明治24年に（猿賀村一尾上町）八幡崎に生まれた工藤浅吉は、県立師範学校本か第一部を卒業して、南津軽郡・中津軽郡の各小学校に勤務した後、大正12年2月に県立弘前高等女学校（弘前中央高校の前身）教諭となった。以来昭和26年3月に退任するまで（25年10月校長事務取扱、26年第十四代校長）28年の長きにわたって勤務した。その感、体育を担当し、スキー・テニス・陸上競技・バスケットボールなどを指導して県下の大会を数多く制覇した。特にスキーとテニスは、全国大会で何度も優勝して弘前高女と本県女子スポーツの名声を高めた。一中略一工藤浅吉の指導のもとに弘高女が最初に頭角を表したのはテニス部である。大正13年9月14日に県下女子庭球倶楽部大会（会場は県立青森高女）が開催された。参加校は青森高女と弘高女、市立女子実業学校（青森中央高校の前身）の三校に過ぎなかったが、（県女子師範学校は棄権）、弘高女が初優勝を飾ったのである。」（②荒井清明著『近代津軽を彩った人々 27－工藤浅吉』1992年11月12日陸奥新報より）このようにして始められたテニスは昭和に入ってから益々実力を発揮することになったのである。工藤浅吉は一方では明治44年に日本に紹介されたスキーをあらゆるチャンスを利用して修得し、「永井校

長にスキーの指導を申し出、永井校長はこれを許可し、学校の費用で五尺八寸のスキー8台、校友会費で12台を購入した。そして大正12年12月27日から3日間、旧制弘前高等学校の裏、桜林の南方へ続く丘で、生徒20人が参加して講習会が開催された。これが本県における女子スキー講習会の最初といわれる。指導には工藤浅吉と竹林善次郎（大正12年12月に、日本杖スキー（ノルウェー式）を修得している）が当たり、永井校長は3日間寒空のもと参観したという。」（②荒井清明著『近代津軽を彩った人々28—工藤浅吉』1992年11月陸奥新報より）その後スキーに対して賛否両論が戦わされたが、「工藤浅吉は、賛成派を頼りにスキーを指導し、弘高女のスキーへの意気と情熱に刺激されて、やがて県下の各高女もスキーを取り入れることになったのである。」（24荒井清明著『近代津軽を彩った人々 28—工藤浅吉』1992年11月陸奥新報より）工藤浅吉の指導により弘高女は全国制覇をなし、校内にスロープを作り、体育の授業にスキーを取り入れるようになったのである。工藤浅吉の女子体育の根本についてはスキーの指導を受けた当時の青森東高校丹内正一氏が「（前略）女子体育の根本は『母体の健全育成にある』と昭和の初めに女子生徒に初めてブルマをはかせ授業を行った。日光に当たって汗が流れるくらいに体を動かすこと—これが先生の理念であった。これを徹底してやる。誰が何といおうとも信じたことを行う信念の人であった。女子に競技スキーを始めてやらせたのも浅吉先生でした。そして全国優勝を成し遂げました。（後略）故人を偲んでいる。」、「工藤浅吉は本県女子体育の発展とスキーの発展の基礎を作り、それを育てたのである。」（②荒井清明著『近代津軽を彩った人々 30—工藤浅吉』1992年12月4日陸奥新報より）

③ 長谷川安津子氏

大正2年9月26日、長谷川安津子氏は柴田やす女史の三女（幼名美穂子）として生まれ、昭和5年県立弘前女学校の第27回生として卒業している。（同期には長年弘前学院短期大学の非常勤講師を務められた安藤たえ先生がいらっしゃる。）さらに旧制東京女子専門学校卒業後、柴田やす女史が経営する弘前和洋裁女学校教諭として勤務。

長谷川安津子先生について、平成元年（1989年）12月25日の陸奥新報、『文化を育む人』というコラム欄に『—広い視野の人間育成』服飾教育家として紹介してあるので、引用させていただく。

長谷川安津子さんは終戦直後の昭和20年10月、旧

陸軍軍医中尉の夫、長谷川重郎さんの復員を機会に、「白銀学園」の前身「志ろがね洋裁学院」を開設した。そのきっかけは、「洋裁を本格的に習いたい」という娘さんたちの要望で決心した。「発足当時は、わずか十人足らずでした」と回想する。

それまでは、女流教育者の柴田やすさんが経営する弘前和洋裁女学校教諭として勤務。洋裁速成科で洋裁と家事を教えていた。長谷川さんは、東京女子専門学校在学中から洋裁が得意で、校長に、卒業後も学校に残って欲しいと強く要望されていたが、洋裁速成科の新設で、帰郷することになった。

昭和27年に新校舎を建設し、翌28年には県下初の学校法人認可。41年に一部3階建ての校舎を新築、学校経営は順調に発展を遂げたのである。そして、51年に専修学校法制定に伴って、県下第一号の専門学校として認可、現在にいたっている。

母の柴田やすさん同様、長谷川さんは女性学校経営者として、また教育者として優れた力量を発揮した。一つの枠にはまらず、幅広い視野から、時代性を先取りしてきた。発足当時は、戦後の混乱期であり、物資も欠乏していた。そこで洋裁の指導には、まず古着を利用したリフォームを取り入れた。25年に柴田高校体育館でファッションショーを催したが、長谷川さんはチラシを手に、婦人会の人たちに説明に回った。—中略—

学校法人「白銀学園専門学校」は現在、洋・和裁とも本科、師範科、高等師範科のほか、モデルスト養成科の七学科の総合服飾専門校。またカルチャーとして、フレックス（洋・和）、調理・組みひも・アートフラワー、着物着付け、パソコン、医療保険の各コースを開講している。

長谷川さんは「専科のパソコンコースは、将来のコンピューター時代を予想して設けたもの。医療保険コースも、夫が開業医であり、事務員、看護婦にしても大変な作業であるところから始めた。就職率は100%、県内外で活躍している」と語っている。「白銀スピリット」がある。それは洋・和裁などを通して、専門的技術を身につけさせ、伸びやかな感性で広い視野を持つ人材育成を目指している。家庭婦人、また職業婦人としての人格形成が未来像の基本理念である。そのため、時代のニーズを敏感にとらえ、学園の環境と教育内容を常にリフレッシュすることに勤めている。時代性を見極めを何よりも大切に、実行する力をつけさせている。

平成元年度からは校長職を次女の万利子さんに譲り、理事長として専念している。後継の万利子さん

は、筑波大学卒業後、米国のニューヨークで研修して帰国。校長補佐として、長谷川さんの片腕となってきた。

長谷川さんはこれまで全日本服装学校連合会から服飾教育功労賞、財団法人衣服研振興会から衣服功労賞、さらに勲五等瑞宝賞を受賞している。長谷川さんは「今後は、私の理想とする生活、食事を作り、花を飾り、一家だんらん、優雅に暮らしたい。だが白銀学園は、私が創設したもので、生涯愛校心は変わらない」戦後の津軽に“服飾文化”の花を咲かせた長谷川さん。時代の移り変わりで幾多の苦労を重ね、今日の礎を築づいた。その創立の精神は、校長の万利子さんにしっかりと受けつがれている。

その万利子校長先生の活躍ぶりが次のように報じられていた。「この11月13日（1993年）、学校法人40周年を記念してファッションショーを開いた。同校は昭和20年、志ろがね洋裁学院として開校。28年に県内初の専門学校法人となり、現在はファッション科、きものクチュール科、モデリスト科、高等科などで洋裁・和裁を指導している。このショーは例年、生徒の作品を披露する目的で開かれている。今年も120人の生徒が個性あふれるファッションで登場、作品はいずれも着物や古いコートなどを着などを再利用したものである。また法人化40周年の今年は青森ヒバの防虫効果を施した新素材の作品も披露され注目を集めていた。」（2019年11月14日陸奥新報より）

特に記さなければならないのは、毎年のファッションショーによって衣類をリフォームするという「リフォーム」という言葉をこの地に定着させたのは長谷川安津子先生であるということである。

次に大正期、昭和初期に弘前女学校で学び、現在もお元気でその道を極めていらっしゃるお二人の卒業生の回想録によって当時の様子を探ってみたい。

4. 弘前女学校

① 相馬みどり氏の場合

i. 略歴

明治44年10月16日生。

大正14年4月私立弘前女学校入学。

昭和5年3月私立弘前女学校卒業。

昭和6年4月東京女子医学専門学校入学。

昭和11年3月東京女子医学専門学校卒業。

昭和11年4月東京済生会芝病院眼科へ入局。

昭和14年12月東京済生会芝病院退職。

昭和15年弘前市に眼科医院開業今日に至る。

平成4年11月3日（文化の日）

50年間の学校医としての功績を讃えられ勲五等短瑞宝章を授与される。

ii. 弘前女学校に入学した動機

私は初め県立高等女学校に受験致しましたが、合格できませんでしたので、弘前女学校に入学させていただいた次第です。

iii. 在学中の弘前女学校について

当時は弘前市外の町村からの入学者は殆ど寄宿舎に入ることになっておりましたので、私も入学と同時に入舎致しました。

キリスト教は私にとって全く無知なものであり、校長のラッセル先生初めミスバイラー等外人の先生方にもなんとなく馴染めないで当分の間途惑いを感じておりましたが、厳しい中にも心暖かく熱心なご指導に依り次第に校風にも馴れ、毎朝の礼拝も心の安らぎとなるようになりました。

寄宿生は日曜の午前中は必ず教会の礼拝に出席し、上級生になると午後は下町方面の日曜学校へ行って子供達に聖書のお話をしてくることに楽しみと喜びを感じるようになってきました。

そして又寄宿生はクリスマスに隣の西洋館へのキャンドルサービスでラッセル先生からお菓子等を頂いてくることも楽しみの一つでした。

学校でも寄宿舎でも上級生も下級生もやさしい先生方に守られて一つの家族のように本当に楽しい毎日でした。女学校時代は私にとって一番心安らかな時だったと思います。

iv. 卒業後の進路について

卒業後は東京女子医学専門学校に進みました。

私の父が医師でしたので私は小さい時から医師になるよう義務づけられていたようです。

ここも又寄宿舎生活です。ここは日本全国、中国等からも来ておりましたので、田舎者で気の小さな私は初めはなんとなく気遣いがしておりま

した。

心細さもあって近くにあった教会に日曜毎通っておりまして。

女子医専もどうやら無事卒業できまして、すぐ東京赤羽にある済生会病院眼科に入局させて頂き研修することになりました。ここでも又やさしい先生方に教えて頂きました。まだまだ勉強したかったのですが、父の医師で昭和14年12月に退職することになりました。

次の年15年3月に弘前市に小さな眼科医院を開業いたしました。その後は結婚、出産、戦争そして子供の一人の不慮の死亡等いろいろな苦しみ、悲しみ、にも遭いましたが、女学校時代に心に刻まれたキリスト教の教えは何時も心の支えになっていたと思います。

女学校とは東京にての勉学中又、戦争中等の間、全く疎遠になっておりましたが、終戦後女学校は弘前学院聖愛高等学校となり、私は再び校友会の幹事としてお世話になることになりました。その中一時学校の理事にもならせて頂きましたが、弘前学院大学が新設されると同時に理事はやめさせて頂きました。

そしてその後は聖愛高等学校の眼科の校医として勤めさせて頂いてきました。女学校入学以来本当に長い間お世話になって参りました。

私ももう八十二才にもなりましたが神様からのお召しがあるまで神様のご用を勤めさせて頂きたいと願っております。ありがとうございました。

(1993.10.20)

② 山鹿さた氏(旧藤田)の場合

i. 略歴

大正2年8月28日生。

(北津軽郡板柳町土井175番地坪田方)

昭和2年4月1日弘前女学校入学。

昭和7年4月1日青山学院神学部入学。

昭和10年4月1日から昭和13年8月まで、富山教会婦人伝道師。(結婚のため退職)

昭和25年4月1日サムエル保育園勤務。

昭和52年10月1日ダビデ保育園に異動、現在に至る。

ダビデ保育園園長となる。

ii. 弘前女学校入学の動機

生みの母(その当時再婚して在東京)が弘前女学校の(卒業)中退生で信者だったので祖母に育てられている私を安じてキリスト教の学校に入学させるよう切望したので。

iii. 弘前女学校の生活について

a. 一言で表せばキリスト教的雰囲気为学校全体に満ち、少女の夢を叶えてくれる快適なものであった。

b. 勉強は厳しく、特に聖書の授業は毎日、次は英語だった。英語の授業一日7時間という日が2日もあり、他の日は毎日2時間はあったと思います。卒業年の五年生は県認可(文部省まで関わるのかわかりませんが)の「小学校専科正教員-英語-」の免状が与えられる試験が学校で行われ、希望者は当時のお金で三円を添えて受験したものです。県庁より試験官が来校し終日かけたのでした。

c. 成績に重きを置いた事は次の事でもわかります。と言うのは、オルガンを学校で習いたいものは平均点85点以上とされていた事です。西洋の先生が校長他2、3名はおられ生徒に対しては厳しかったと記憶しています。

d. 一方、授業以外は「自由」な雰囲気が濃く楽しさが一杯だった。

e. 伝道精神も盛んで、観桜会〜現・桜祭り〜の期間中の路傍伝道の応援に毎夜出かけて、讃美歌と奨励・証しの奉仕をした。また毎土曜日と日曜日に市内10数箇所教会学校を開き、YWの先生、生徒が数名づつ出かけたのです。

その日のために金曜日の放課後、模擬教会学校が実施され、先生方が生徒となり、生徒が教会学校での司会・お話し・讃美歌等を練習したのです。毎週欠かさず行われたのです。

iv. 卒業後の進路は?

入学時の7月受洗した私は、学校生活の中で伝道者になるべき思いが徐々に育てられて、同級生3人と青山学院神学部を希望した。(私はその中で、学校教師になる師範科を選んだ)。

v. 現在〜〜云々

大変感謝している。若しもキリスト教を知ることがなかったら私は人生の裏道を歩く人間となっていたと思う。

現在乳幼児保育に打ち込む生活が与えられているのも弘前女学校に入学を許された御蔭と感謝せずにいられません。この道一筋の歩みも53年目となり、感無量です。(1993.10.18受)

山鹿さた先生は弘前学院の初代校主である山鹿元次郎先生の子息素先生とご結婚、素先生が弘前学院の宗教主事・聖書科の教諭、さらには弘前学院大学の教授をしておいで約30年間は元次郎先生が創設

された私立託児園（現サムエル、ダビデ保育園）を支えてこれ、現在は素先生がサムエル保育園の園長、さた先生がダビデ保育園の園長として活躍していらっしゃる。さらにさた先生は長年わたり弘前学院校友会の副会長を務めておられる。

おわりに

日本の女子教育は明治の初期からこれまで「良妻賢母」を目的として教育がなされてきたが、今日では細川内閣のメンバーに文部大臣赤松良子、国務大臣（経済企画長官・総合交通対策担当）久保田真苗、国務大臣（環境庁長官・地球環境問題担当）広中和歌子の三人が入閣していることからわかるように女性も政界にも進出する時代となったのである。だから、女性もどんどん国際化社会の中でも活躍できるキャリアウーマンを育成することが教育の必須の課題となるのではないだろうか。

東洋英和女学院大学が四年制大学（社会科学部）を開校するにあって座談会をしていた様子が1989年1月18日の神奈川新聞に載っていたが、その中のお二人の言葉を引用したい。元本学の学長で当時東洋英和女学院院長であられた田島信之先生は「私立学校には、変わってならないものと、変わるべきものと、二つあると思う。東洋英和女学院は1884年、東京・六本木鳥居坂の地にカナダの婦人宣教師ミス・カートメルによって創立され、1984年に百周年を迎えた。東洋英和は従来、女子教育の名門校といわれ、高校、短大以下の教育の充実を図ってきた。百周年を機に変わるべきものとして国際化時代の21世紀に向けて、女子教育にも本格的に力をいれていこう、という大きな柱を建てた。一中略一その第一陣として、短大が1986年に六本木から移転した。それに伴い短大も従来の保育、英文科の二学科の他に、国際教養科も新設し、短大の充実を一応達成した。そしていよいよ、四年制大学の設置になった。横浜を中心とした地域社会に役立つ大学にしたい。一中略一東洋系派は今まで幼稚園から短大までだったが、これで一貫教育が完成する。これは短にエスカレーターシステムのメリットだけでなく、キリスト教精神に基づく一つの変わらぬ教育理念で人間教育ができる、ということに最大の意味がある。」といわれている。又学長の朝倉孝吉先生は「今度できる四年制女子大の内容、特徴は」という問いに対して「私学は建学の精神を尊重しなければならないが、国際化時代のニーズにもこたえねばならない。従来の良妻賢母型教育から、国内や外国で活躍する女性の育成を図らねばならない。一中略一女性の社会進出が進み、それが一応、定着してきている。産業や官界などでも質の高い女子の労働力を求める声が強くなってきている。私どもの大学

はキリスト教による人格形成とリベラル・アーツ（普通の大学の一般教育科目を超えた学際的な教養学問の意味）を中心にした国際教養陣を育てることにあるから、期待されるところも大きい。」とおっしゃっている。

このように女子への教育に関する考えが変化してきているが、ここで再び大正期に戻って一つのエピソードを紹介して本稿を終わりとしたい。大正12年に弘前実科補習女学校を卒業後、尾上町金田小学校の代用教員を勤め、昭和21年茶道遠州流弘前支部長、48年茶道遠州流家元顧問、53年華道遠州派東北総家督となられた木村コト女史が昭和61年県文化賞を受賞されたが、木村コト女史が書かれた『コト様の昔語り』に「再興した東奥義塾に新風を吹きこもうと、当時の塾長笹森順造先生は、アメリカ・オハイオ州立大学を卒業した宣教師を、二年の約束で弘前に招いた。名はルーター。高木武夫先生やアイグルハート夫妻、若い音楽家のシャクロック先生と共に、昼は昼で、夜は7時から夜学校を開講したのは昭和12年のころだった。

女生徒は角み呉服店の宮川さださん、下土手町今泉書店の今泉まさ子さん、中土手町の果物店石井千代さん、そして季刊の同人雑誌「黎明」に、歌人として出るようになった虎谷（木村）コト。後は新しい教育に熱意を燃やす若者たちでいっぱいになった。一中略一このほかに私は、ルーター夫妻が住む下白銀町の西洋館を訪れ、賄い人夫婦と一緒に小学校低学年の日本語と、英語の交換授業をした。朝から晩まで、ルーターさんが私に聖書の講義を、私からルーター夫妻に日本語をというように、夫妻がアメリカへ帰るまでの二年間続けた。一中略一いよいよ夫妻がアメリカへ帰る日近づき、私は伝道婦として渡ることを望まれたが、高木先生が大反対した。私は、真心があれば体ひとつでどこへでもいけると考えた。」と書かれている。茶道と華道の純日本的な教育を受けられたコトさまから宣教師の先生の活躍ぶりを伺うとは意外であったが、津軽地方の女子教育を追究する筆者にとってはとても参考になることであった。本稿を記すにあたって、引用を許して下さった荒井清明先生、船水清先生、貴重なご家族だけのご本である『コト様の昔語り』をお譲り下さった木村家のみなさま、お忙しい中をアンケートにお答え下さった先生方に紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。（1993.11.15）

引用・参考文献（含新聞）

1. 土肥重子編『白菊』百周年記念号
フェリス女学院白菊会発行 昭和45年版
2. 久野明子著『鹿鳴館の貴婦人 大山捨松ー日本初の女子留学生』
中央公論社 1988年版
3. 青木生子著『明日の女子教育を考えるー女子大学長の手帳

- から』 講談社 1990年版
4. 福島恒雄著『藤田匡伝ー我が国最初の盲人牧師ー』
藤田匡伝記刊行会 昭和41年版
5. 大木英二著『弘前教会百年小史』
日本キリスト教団弘前教会 1983年版
6. 本多繁著『米国のプロタンティズムと日本人』
丸善株式会社仙台支店 平成3年版
7. 船水清著『ここに人ありき 柴田やす伝』
柴田学園 昭和61年版
8. 船水清著『ここに人ありき 第一巻 山鹿元次郎』
陸奥新報社 昭和45年版
9. 船水清著『青森県の写真事始』
北方新社 昭和52年版
10. 荒井清明著『弘前今昔』 北方新社 1985年版
11. 荒井清明著『続弘前今昔』 北方新社 1987年版
12. 荒井清明著『近代津軽を彩った人々ー永井直好』
陸奥新報連載 1992年3月
13. 荒井清明著『近代津軽を彩った人々ー小山内もと』
陸奥新報連載 1992年6月
14. 荒井清明著『近代津軽を彩った人々ー工藤浅吉』
陸奥新報連載 1992年12月
15. 木村コト著『コトさまの昔語り』 昭和62年版
16. 小樽山ルイ著『アメリカ婦人宣教師』ー来日の皆景とその
影響 東京大学出版会 1992年版
17. 『文化を育む人・広い視野の人間形成』
陸奥新報 1989年12月15日